ニュース寸評

韓国の密航者 ふえる一方

今年は千人超すか すぐに働ける魅力

十一月十二日の朝日新聞朝刊は大阪市内版のトップにこの見出しを並べていた。

去年、密航者として大阪でつかまったのは六百人だったが、今年は六月末までの半年の間に去年一年分以上がつかまったそうだ。

また記事のなかには次のように書いているところもあった。

――不況とはいえ、韓国よりいい條件ですぐにでも働けるのが、密航者にとって大きな魅力となっているという。――ある程度、金がたまると強制送還してほしいと自首して来るケースもままある。半面、最近では日本の不況も深刻で密航して来たものの仕事がなく、

「祖国の方がましだ」と自首して来た話もあるという……

新聞記事をそっくり信じてしまうのは危険だが、このへんはまず大丈夫だろう。そう思って考えた。

密航、という。つまり秘密・航・海か。それは一体、何に対して秘密なのか。秘密にしなければならないのか。

韓国から日本へ密航という場合、そうしてやってくる者たちが、かくれてこっそりとになるのは、出てくる韓国の法・政府＝国というものに対してかくれてこっそりとであり、入ろうとする日本の法、政府＝国に対してもかくれてこっそりとしなければ、つかまえられてしまうからだ。

オニゴッコでつかまるのは、いくらつかまっても楽びで面白いがへそれでも自分ばかり

早くつかまっては面白くない)、国につかまるということには、面白いことは一つもない。

しかし、仕事のないところからあるところへ、楽んでいては食えない者が働き口を探して動くのは、ごく自然なことなのだ。

山野の鳥やケダモノでも海や川のサカナでも、食いものをポのて動く。ゴキブリでもハエでも蚊でもそうだ。動くについてはそれぞれの條件が天然にあるが、ともかく動くことについて、秘密にということはない。人間だけが密航なんてことをする。法・政府・国というやつは、この場合、人間に対してまったくジャマなものだ。

昔、日本がたくさんの大名の領地に分れていたころへ封建時代)、年貢の取り立てがきつかったり、不作がつづいたりすると、百姓はほかの大名の領地へ逃げた。それは逃散といわれて、いまの密航と同じように、見つかればつかまる悪事なのだった。どうして悪事かというと、かりに百姓がすっかりよそへ逃げてしまえば、田も畑も荒れて作物の作り手がなく、だから年貢＝税金が取りたくても取れず、働かないで支配する大名とその家来のサムライたちが困ってしまうからだ。つまり悪事というのは、支配者にとって都合が悪いから悪事なので、逃散する百姓としては、住みなれた故郷を棄てたくはないが、棄てるよりほかに生きる道がないから棄てるわけで、少しでもマシな暮しを求めるための、自分を守るための、ちっとも悪くない、ごく当りまえの行動だった。そして、逃散もできないほどいためつけられている場合は、集団を組んで大名とサムライたちに反抗した。それが百姓一揆ということだ。

ここまで考えて、さてもう少し考えるには時間がないへメ切り切迫)のに気付いた。

韓国にせよ日本にせよその他どこの国にせよ、国があるから密航がある。国・政府・法がなければどうなるのか。